

特集 「念仏往生の大地に立つ」(高史明) ● ぶつじあれこれ

シリーズ・真宗の歴史 長島一向一揆 ● 『仏典童話』を訪ねて

坊や、ごめんなさい。

あなたを生き返らせる薬は
みつからなかったわ。

でも、おシャカさまにお礼を
申しあげに行きましょう。

坊や、お母さんに大切なことを
教えてくれてありがとう。



文/「釈尊 生涯と教え」(東本願寺発行)より

関連 → P8

『仏典童話』を訪ねて一



「自らを灯火とせよ、法を灯火とせよ。」釈尊がクシナガラのでて涅槃を迎えられたそのとき、阿難を前に最後の説法をなさったそのお言葉です。私たちがこのかけがえない人生を、何をよりどころにして生きていけばよいのか、釈尊は語ってくださるのです。また、宗祖親鸞聖人はこの釈尊の教えをどういったかされたのでしょうか。正に、宗祖の生涯をかけた歩みは、釈尊の教えに帰っていくことではなかったかと思われまします。その釈尊の教えが象徴的に語り継がれているのがこの『仏典童話』であります。豊かで便利な時代でありながら矛盾と混沌を生きる現代人に、釈尊が説かれた法は自らを映し出す鏡となり、闇を照らす光となることでしょう。

『仏典童話』 第五話「けしの種」

あらすじ

ある町にキサー・ゴータミーという若い母親がいました。あるとき、彼女の幼い男の子が突然の病にかかり命を落とします。彼女は、わが子の死を受け入れることができず途方にくれます。そして、子どもの亡骸をかかえ、「だれか、この子を生き返らせる薬をください」と町中を歩き回ります。その姿をみて哀れに思ったある人が「お釈迦さまのところへ行きなさい」と勧めました。

ゴータミーは、その言葉に従いお釈迦さまを訪ねます。お釈迦さまは、やさしく彼女に語りかけます。「よく来たね、ゴータミーよ。それでは、町へ行ってけしの種をもらってください。ただし、一度もお

葬式を出したことの無い家からですよ。」その言葉を聞き、彼女は町に戻りけしの種を探し回りますが、お釈迦さまの家にもありません。重い足を引かず、訪ねた家々々のお話を聞く中で、彼女はお釈迦さまの本意に気づいていくのでした。

「坊や、ごめんなさい。あなたを生き返らせる薬はみつからなかったわ。」

ゴータミーは、大切なことに気づきお釈迦さまのところへ戻りました。「そうです、ゴータミーよ。生きているものは必ず死ぬのですよ。ちやうど大洪水が眠りに沈む村々を呑み込み運び去っていくように、生命あるものは誰一人として死を避けることなどできないのです。」お釈迦さまは、やさしく静かに語りかけました。その説法は彼女の心に深く染みわたっていました。やがて、彼女はお釈迦さまの許しを得て弟子となりました。

【参考資料】『仏典童話・ブツダと親鸞』(ともに東本願寺発行)

編集後記

岐阜同朋「第97号」をお届けします。

ご覧のように少し様変わりをしました。

編集委員に新たなメンバーも加わり、「いいものをつくりたい」、その願いからのスタートです。

日一日とめざましい発展をとげている今、データ時代とも言われるべく、いろいろなものが数値であらわされる事が多くなって

います。ともすると、人の価値までもがデータとか数字などと、目に見えるものによって左右されがちです。

目にみえる部分だけにとらわれないところへも向けられる目を……。

そんな思いをかよわせながらの発行。

年齢とともに弱くなっていく視力。でも、心の視力は年齢を重ねても弱くならないでいてほしいものです。(玲)

特集 短期集中連載①

念仏往生の大地に立つ

高 史明

「人、指をもつて月を指う、もつて我を示教す、指を看視して月を視ざるがごとし。人、語りて言わん、「我指をもつて月を指う、汝をしてこれを知らしむ、汝何ぞ指を看て月を視ざるや」と。これまたかくのごとし。語は義の指とす、語は義にあらざるなり。これをもつてのゆえに、語に依るべからず。」

親鸞聖人の「教行信証」(化身土・本巻)には、右の言葉が開示されていました。「化身土」とは、いわば言葉の知恵とともに人間となつている人間世界にはかなりません。冒頭にあげた言葉は、まさにその人間世界の知恵の根つこの闇を抉りだしているのです。人間とは夜空に浮かぶ月を見上げているときでも、実はその月をさしている「指」を見ているのであつて、決して月そのものを見ていないと言われているのでした。驚くべき指摘です。

しかも、親鸞聖人のこの指摘は、それから七百有余年もの歳月を経た現代人にとつても、なお真実の明かりだと言えないでしょうか。実際、私たちは夜空の月を見上げていて、ときには、実は頭の中の「月」という言葉を通して見ているのでした。月そのものを見ているのではない。ここに目線を大きく転換して、人間の知恵のあり様を現代に即して考えてみたいと思います。

現代世界は、今日、重い暗雲に覆われている。限られないと考えていいのではないか。私たちはここに人間のあり様そのものにまで、真っ直ぐに目を向けていきたいと思います。

「バーチャル・リアルティ」という言葉がありました。現在のコンピュータは、現実そっくりの画像を作り出すことができたのでした。例えば、子どもたちはその電子機器が作り出す仮想現実ののめりこんで遊び、孤独な若者には仮想恋人を作り出して愛を囁いてくれる者が少なくないと言います。まさしくコンピュータが、現実そっくりの世界を作り出すからであります。しかし、このコンピュータの利便性の裏側には、底知れない落とし穴があつたのではないか。

つい最近のことです。電子機器が作り出した仮想現実の中で車を走らせていた子どもが、現実の道路に自動車を走らせるという出来事が起きていました。あるいは現代の若者には、コンピュータの中の恋人と仮想恋愛のめりこんでいる者が少なくないと言います。しかし、コンピュータの中の恋人が、いかに理想的な美男・美女であつたとしても、その恋人と本物の愛が語り合えるものではありません。にもかかわらず、現代人は幼児の頃から、仮想現実とともに成長しているのです。その世界では、真実の愛は成立しないと考

るのでした。未曾有の金融不安が、世界経済の屋台骨を根っこから揺るがし始めている。アメリカなどからは、百年に一度の危機という声すら聞こえてきています。百年に一度とは、い



高 史明(こ さみよん)先生 1932年生まれ。作家、評論家。山口県生まれ。本名・金天三。3歳にして母と死別し、石炭仲士であった父に育てられる。高等小学校中退後、職を転々としつつ政治活動などを行う。1971年、初の著作を上梓、評論家となり、1975年、『生きることの意味』で日本児童文学者協会賞を受賞するが、同年、一人息子の岡真史が12歳で自殺。その遺稿詩集『ぼくは12歳』を妻の岡百合子との編纂で刊行する。その後、『歎異抄』を通して親鸞の教えに帰依し、著作のほか、各地で講話活動を行う。著書『世の中安穏なれ』『悲の海は深く』『念仏往生に導かれて』等多数

ば危機の深刻度を示す尺度でありましょう。そうであれば、今日の危機は五百年に一度、あるいは千年に一度という尺度で見つめられ、てもいい危機だと言えます。

思えば、二十世紀には、第二次世界大戦の惨禍が全世界を焼き尽くしたものでした。その世界大戦の根っこには、一九一九年に突発したアメリカ発の世界大恐慌が横たわつていたのでした。「広辞苑」は「恐慌」について、次のように読み解いている。「価格の暴落、失業の増大、破産、銀行の取り付け騒ぎ」。この恐慌の読み解きは、そのまま今日の現実に通底していると言えましょう。いや、今日の危機は、はるかに巨大な大怒涛になつていて、考えられます。世界の首脳陣が鳩首凝議して、火の嵐にならないことを心から願わないでは

おれませんか。ところで、世界の首脳陣は、果たして今日の世界大の危機の根っこを読みぬき、突破できるのでしょうか。先日のごとです。ある外国のテレビ報道が、今日の金融危機の根っこを「バーチャル」という言葉でもって報道して、言わなければ、今日の金融システムをバーチャルという言葉で捉え、その危機が実体経済に及ぼす影響について懸念していたわけ

です。確かにアメリカのサブプライム・ローンが引き金となつた今日の経済不安は、経済実体を無視した金融商品の乱発に震源地があつたのでした。それこそバーチャル商品が、世界経済を砂漠の荒野にしてしまったのです。ところで、今日の経済恐慌の根っこが、実体とバーチャルという経済システムの構造的な矛盾

えられます。それどころか、いかに孤独であっても、その孤独感もまた仮想のものとなるのではないか。現代人には愛も孤独もなく、さらには生ということ、また死ということまでもが仮想世界の荒野となつていて、考えられます。昨今の世の中には、いわゆる「アキハバラ」の無差別殺人に通底する事件が多発して、いました。仮想現実の荒野が広がっているのではないかと思えます。アメリカのイラク戦争の発動もまた、仮想現実が生み出した妄想に根っこがあつたのではないか。

例えば、死という漢字が読めても、そのまま「死」が分かるのではないのでした。「死」の「夕」は、人間の肉をそぎ落とした後の「骨」を表し、その右の「匕」は、骨に額ずいている生きた人を表しているのです。現代人はしかし、「死」という漢字が読めるようになると、ただちに「死」が分かつたつもりになり、手を合わせなくなつているのでありましょう。言うなれば、月を教えられると、月を指している「指」を見つめて、月が分かつたつもりになる荒野を生きているのです。

現代の世界大の経済危機は、まさに世界中に浸透してゆきつつある仮想現実の象徴なのだと思えます。コンピュータの利便性は、まさに計り知れないものだったのでし

た。思えばしかし、そのコンピュータの根っこをなすのは、二進法の「数」なのでありましょう。その「数」とは、まさに月を指す「指」にほかならないのです。現代人は今日の百年に一度ともいえる危機を通して、果たして真実の月を見つめる機会へと転換してゆけるのでありましょうか。

現代人が当面している危機は、まさに文明世界全体のあり様を問いにしていると考えられます。しかも、宗教者こそがまた、ここにもっとも深く問われていると言えましょう。例えば、親鸞聖人の「歎異抄」の十一章には、すでに次のように告げられていたものです。「一文不通」ともがらの念仏もうすにおうて、「なんじは誓願不思議を信じて念仏もうすか、また名号不思議を信ずるか」といひおどろかして、ふたつの不思議の子細をも分明にいいひらかずして、ひとのころをまどわすこと、この条、かえすがえすもころをとどめて、おもいわくべきことなり。」

合掌

ぶつじ あれこれ

三具足(五具足)の燭台、花瓶、香炉では、蠟燭を灯し、お花を立て、線香を燃やします。これらは、仏にお供えをし、仏前を荘厳するものとして、もっとも大切なものです。お内仏の蠟燭の火やお花、線香の香りは、ご本尊である阿弥陀如来の徳を表しています。それらを仰ぎつつ、仏の心にふれさせていただきたいものです。

1 お線香について

お線香の香りは平等にいきわたり、あたりを清らかにするといふはたらきを持っています。それはまた、誰をも差別することのない清らかな仏のはたらきを、表しているとも言われています。



お線香の扱いは、土香炉(青磁色の陶製)の大きさに合わせ、適宜に折り火を付けて灰の上に横にして置きます。これは燃香と呼ばれる作法です。このように、真宗の燃香の作法の由来からしても、通常のお勤め、枕経、通夜、葬儀等、すべてのお仏事においてお線香は立てません。

「燃香とは太めの線香(現在はこれを附茸とよんでいる)に火を点じて灰の上に置くこと」(『真宗の儀式(東本願寺発行)』)とあるように、もともと附茸という茸を乾燥させたものを火種として、その附茸の上に抹香を乗せておりましたが、その附茸の代わりにお線香が用いられるようになりました。

2 お花(仏花)について

通常は松やヒノキ等を芯にして、四季折々に咲く花や草花等を取り混ぜて挿します。花は何でもいいのですが、トゲのある木の花やツルに咲く花は仏花には使いません。お花は本尊でなくお勤め(お参り)をする者の方に向けて立てられています。これはお勤め(お参り)をする者が仏法を聴聞するために向けられているのです。私たちが仏の声を聞かせていただくためなの



です。また、お花をお飾りするもとの意味は、綺麗に美しく咲いている花もいずれば枯れていくように、老少不定の生きとし生けるものの姿(無常の姿)を表現しているということなのです。ですから造花は使いません。

3 蠟燭について

蠟燭の光は仏の徳を讃嘆し、仏の智慧を表現したものとも言われています。平常は木蠟(朱塗りの木製のもの)を立てておきます。蠟燭を灯すのは、月命日、祥月命日、年忌法要、



春秋の彼岸会、盂蘭盆会、修正会、報恩講などのお勤めのときです。ただし、命日、祥月命日、修正会の際は、白のイカリ形蠟燭でも構いませんが、原則として、いずれの時も朱蠟(赤のイカリ形蠟燭)を灯すのが正式です。白のイカリ形蠟燭(正式には銀色のイカリ形蠟燭)を使うのは、その家のどなたかが亡くなられてから四十九日までの間のお勤めの時だけです。

シリーズ 真宗の 歴史

長島の 一向一揆

私たちの宗派や地域は、長島一向一揆と大変深い関わりをもっています。この地域からも多くの僧侶や御門徒の方々が一揆に参加し亡くなっています。

なぜ、長島一向一揆が起こったのでしょうか。なぜ、織田信長と対等に戦う力を持ったのでしょうか。また、真宗にとって歴史的にどんな意味を持つのでしょうか。過去に遡ることによって、新たな発見ができると思います。

今号は、長島一向一揆を紹介します。



背景

長島という地名はもと「七島」であり、木曾川、揖斐川、長良川の河口付近の輪中地帯を指します。この地域では三川が網の目のように入り組み、戦国時代には要害の地で三河・尾張・美濃の三国にまたがって勢力のあった真宗教団にとっては、伊勢への勢力拡大に絶好の地でありました。河川交易も

盛んで莫大な収益もありました。信長にとってもこの地域は戦略的にどうしても押さえたい交通の要地であるばかりでなく、河川交易の商売から得られる収益は、お米の収益と違い一年を通じて満遍なくあり、必要な時に出させられる収益でいつでも戦ができる点で大変魅力でした。

(信長の商売による収益の魅力は、後の楽市楽座の発想へとつながっていきました。)

この当時は、商人や漁師、船乗りに対する差別がひどく、彼らの「自分達は救われないのか」という思いの中に真宗の教えが広く深く浸透していきました。そして、数十にも及ぶ真宗寺院や道場ができ真宗門徒が大きな勢力を持つようになり、尾張国西南部、美濃国南部、伊勢国北部に一種の自治勢力を誇っていました。

その統制のため、本願寺蓮如上人の子を招きたいという地域の強い要望に応え文亀元年(1501)に蓮如上人の六男である蓮淳を住職



国立木曾三川公園内「治水タワー」から望む現在の長島町。手前が長良川、奥が木曾川、中央が長島町。

として杉江の地に願證寺が創建されました。国人領主層を組織した門徒たちによる地域支配体制を確立するに至り、門徒衆約十万人、石高十萬石(一説には十八萬石)を擁したといわれています。

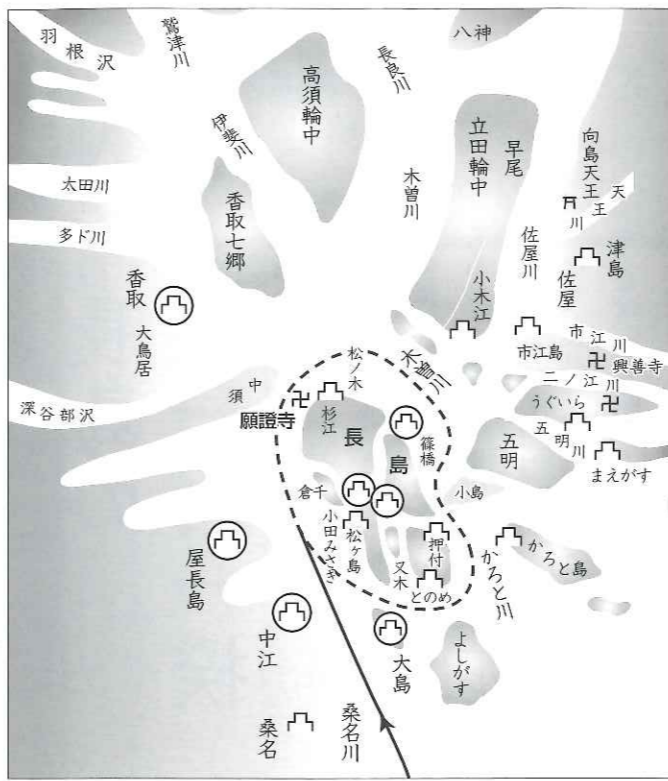
そのためこれらの地域の寺領は完全に自治独立を果たしており、

その強大な勢力に織田氏や斎藤氏をはじめ、各国領主たちは全く立ち入ることはできませんでした。稲葉山城を追われた斎藤龍興なども長島に逃げ込んでいます。

しかしながら、信長の尾張統一や美濃攻略、上洛における北伊勢の侵攻には門徒衆をあげての反抗はしておらず、多くは不介入を続けました。そのため北伊勢侵攻の際、織田軍は美濃方面から侵攻しており、長島は戦場になつてはいません。しかし、これによって長島側は信長の勢力圏に周囲を囲まれることとなりました。

蜂起

織田信長長島攻めの図 天正2年(1574)



元亀元年(1570)信長から石山本願寺の明け渡しを申し渡された頭如上人は、御開山(親鸞聖人)以来の法燈を護る唯一の道として、全国の門徒に仏敵信長と戦えと厳しい下知(御沙汰)を飛ばされました。

本願寺の反信長蜂起に伴って、信長によって領地を追われ長島の地に逃げ込んでいた斎藤龍興、石橋義忠らの非門徒の武士団の連合軍が一斉に蜂起しました。信長軍が大坂、京都で本願寺に苦戦をしいられている最

開城、和睦が成立しました。しかし、信長は一族や重臣を討死させた一揆勢を嫌悪していたため、長島から出る者に不意打ちをかけて殲滅を謀りました。(これには、前回の戦いで長島一向一揆側に条約違反があったため、信長が一揆側の和睦申し入れを虚偽と見なしていたとの説もあります。)

ところが、この不意打ちに激怒した門徒衆が捨て身の反撃に出て寄せ手(信長方)本陣に突入しました。逆襲を受けた織田一門衆は大混乱に陥り、信長の庶兄である織田信広や弟の織田秀成らを失うこととなってしまいました。そのため、信長は残る屋長島・中江の2箇所は柵で囲んで2万の男女を焼き殺したと伝えられています。

一揆鎮圧後、門徒による自治領は完全に崩壊し、長島城は滝川一益に与えられました。

その後

共に悲惨を極めた石山一向一揆の後の石山本願寺は、豊臣秀吉の援助で京都へ移って再建され、現在の西本願寺の基ができ、徳川家康によつて西本願寺と東本願寺に分派され、現在に至っています。

長島一向一揆の根拠地の坊舎・願證寺は、明治の河川改修により長良川左岸(中堤)

中に、下間頼旦らに率いられた数万に及ぶ一揆衆は長島で唯一信長側についた長島城主の伊藤重晴を攻め落とし、続けて11月には信長包囲網によつて完全に孤立していた信長の弟、信興を尾張小水江城で討ち、伊勢桑名城の滝川一益を敗走させました。信長は、信興自害落城の知らせによつて、急遽天皇を勅して本願寺と浅井・朝倉連合軍との和議を探り、12月17日、信長は岐阜城へ帰陣をしました。

翌元亀2年(1571)5月12日、信長は信興の弔い合戦と称し、また本願寺の拠点を壊滅する為、伊勢長島に柴田勝家を主将とする五万五千の兵を出し、信長自身も津島まで出陣し、攻撃をかけるものの、雑賀衆をはじめ、本願寺から派遣された多くの傭兵集団と鉄砲に苦しめられた上、伊勢湾の水軍衆を完全に一揆側に握られてしまつていたこともあり瓦解しました。この戦いで柴田勝家は重傷を負い、殿軍を努めた氏家直元が討死するなど織田軍は散々に蹴散らされました。

その後、織田軍は天正元年(1573)9月に北伊勢の諸城を落とし長島の孤立・弱体化に成功するものの、林通政が討ち取られるなど損害も甚大でした。

よりの水中に沈んでいます。長島一向一揆で活躍した願證寺住職蓮淳の子孫が一揆鎮圧後美濃に避難していましたが、開墾ラッシュで力をつけてきたこの地域の幾つかの講(本願寺門徒の集団)からの強い要請を受けてこの地に留まりそれぞれ寺院をつくり、真宗興隆に貢献されました。また、その寺院の中で、本願寺第12世教如上人より教如遭難(関ヶ原)の際、功績のあった

【註】雑賀衆(さいかしゅう)は、戦国時代に紀伊国北西部の雑賀荘を中心とする一帯(現在の和歌山市)の諸荘園に居住した国人・土豪・地侍たちの結合した集団(一揆)である。雑賀党ともいい、「さいが」とも読む。16世紀当時としては非常に多い数千丁単位の数の鉄砲で武装しており、きわめて高い軍事力を持つ傭兵集団としても活躍した。戦国時代には、「雑賀衆を味方にすれば必ず勝ち、敵にすれば必ず負ける」といわれていた。

鎮圧

天正2年(1574)6月、浅井・朝倉氏を討ち滅ぼして後顧の憂いを断つた信長は、石山本願寺・越前・長島の本願寺勢力を各個撃破すべく大動員令を発します。海を九鬼嘉隆、佐治信方ら水軍衆、陸を織田信忠を筆頭とする織田一門衆をはじめ滝川一益、柴田勝家、佐久間信盛、羽柴秀長、森長可、蜂屋頼隆等、総勢8万とされる大軍勢で囲ませました。

一揆衆は各輪中に籠つて頑強に抵抗したものの、織田軍に諸砦を次々と落とされ、長島・屋長島・中江・篠橋・大鳥居の5個所に追い詰められ兵糧攻めにされました。8月には篠橋、大鳥居が陥落しました。さらなる攻撃に一揆勢は耐え切れず、9月29日に降伏

- 八ヶ寺、願教寺(市場) 永明寺(西小熊) 了応寺(東小熊) 伝流寺(堀津) 西岸寺(竹鼻町下城) 明超寺(栗野) 善覚寺(高桑) 永照寺(平方) に対して長島山緒組を名乗ることを許されました。

【参考資料提供・解説】願教寺住職 長島秀賢氏
【長島一向一揆に関する見学施設】
輪中の郷
三重県桑名市長島町西川1-093
☎0594-4210001

